



サポちゃん通信



自然が好き

生きものが好き

No. 2



目次

・サポーターズチャットルーム虫探しの極意を語る	3-4
・秋から冬の採集法 ビーティング	5
・セミはカメムシの仲間?	6
・ごみのかたまりのようなものは?クサカゲロウの幼虫	7
・蛾の美しさに魅せられて	8
・ありふれたチョウとと思っていたのに	9
・セモンジンガサハムシ	10
・お菊さん?	11
・ノコギリカメムシ	12
・スマレ	13
・鴻ノ峰林道や兄弟山林道沿いの冬の昆虫	14
・鴻ノ峰林道や兄弟山林道沿いの春の昆虫	15
・コラム ヒメツチハンミョウ・編集後記	16

表紙・イラスト

原まゆみ

虫ムシ越冬探検隊

今、生物観察は3回目の冬を迎えました。この時期は草が枯れ生き物たちの越冬の季節です。それらはツバキなどの木々の葉の裏にひっそりとまっていたり、木の幹に集まっていたりします。そこで高い場所にいるものは木の枝を揺すったり幹を棒で叩いて広げた傘の中に落としたりして捕獲します。土を掘り返しふるいにかけて、幼虫・卵などを確認したり…。そこには発見や驚きがあります。まだ、生きていたのか…おや、こんなところにも…とか。落葉した木々が枝先に固く芽を包み春を待つように、生き物たちもじっと冬を越えようとしています。今号は創刊号に続いて春から秋にかけて見かけたものが中心ですが、私たちの観察はずっと続いています。 2018年2月

サポーターズチャットルーム虫探しの極意を語る

毎月2回、集まっては昆虫採集にいそしむ皆さん、やり方は指導されているのではなく、それぞれ自由にしています。大きく分けて流派は2つ、理論派と省エネ派だそうです。



まず、理論派の代表村上さん。大きな蝶が狙いです。「蝶道というのがありますね、蝶は好きな植物が決まっています、その花をたどって飛びます。森が切れて草地になっているようなところとか、明るい谷間のような水辺とかが狙い所ですね。その道を見極め待ち伏せするというのが効率的」へえ、蝶々って楽しく舞い遊んでいるわけではないのね。「蝶も

一生懸命生活しているんですよ」それを待ち伏せて効率的に捕まえるって…「安心して、そんなに採れませんから（泣）」

省エネ派は山田さんや上田貴子さん。基本しゃがんでじっとしています。「葉っぱの裏とかをじっと見ると何かいるんですよ」

「昆虫採集とかしたことないから、動き回ってもね～」

ゴミにしか見えないようなのが発見だったりするようで。珍しい小さな生き物を見つけては田中先生を驚かせています。神は細部に宿る…

「でも、大きいのを発見することもあるんよ！カマキリを見つけていざ捕獲となってよく見るとおなかが大きい…その時山田



さんが「同じ女としてどうかしら」と呟いてくれて、ほっとしてリリースしたこともありました」

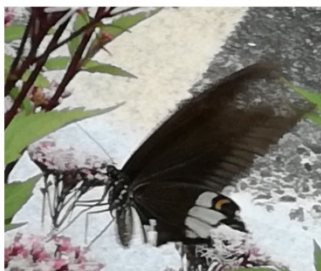
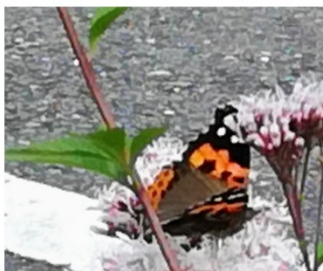
種を超えた女の連帯ですか！これからもがんばってね

そして、さぼちゃんたちは、この春から第3の道に踏み出すことにしました。それは「おびき寄せ作戦」県立博物館の空き地を耕して草花を植え、蝶を呼ぼう！というもの。

きっかけは、去年の秋博物館の近所のフジバカマの花壇に9種類もの蝶が集まっていたこと！サポーター活動を終えた後花壇のそばに1時間以上座り込み、目をキラッキラさせながら眺めてる中高年6人の姿はシュールなものがありました。



フジバカマの花壇に
吸蜜にきたチョウ類
アサギマダラ



アカタテハ（左）
モンキアゲハ（右）

あの光景を作れたらと話は盛り上がり、今のところ、フジバカマ、カラケツメイ、ウマノスズクサなどが候補に挙がっていますが、四季の移り変わりにつれて花のリレーができるように植物選びと土木作業が始まります。

春が待ち遠しい中高年虫むし開拓団誕生です！

秋から冬の 虫さがし

寒くなるとなかなかムシがみつからなくなります。
でもいろいろな方法でさがしているんですよ♪

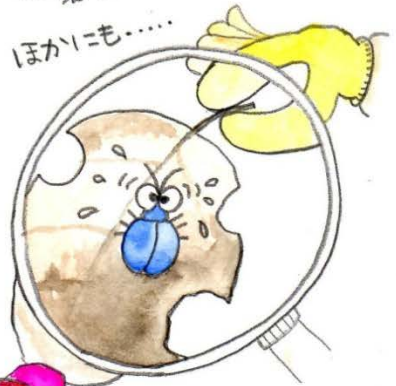
また、種類によって冬越しの方法が違います。
それがわかってくると、さがすところもしぼれますよね〜♡



ビークンク

傘を下に構えおもに
常緑樹の枝などをたた
いて落ちてきた昆虫類を
採集します。

ほかにも……



落ち葉の裏とか…

セミはカメムシの仲間？



アマダテントウ 体長約4mm



アカガネサルハムシ 体長約7mm



フクラズズメの幼虫



ツクツクボウシ 全長41-47mm

道端に咲く花の名前を知りたくて野草の観察会に参加。

樹木・鳥・昆虫と興味はつきない。

昆虫といえばチョウ・トンボ・カブトムシ・・・

でも花や草に止まっている数mmの虫 虫 虫・・・

虫眼鏡で見ると箱根の寄木細工のようなアマダテントウ、光り輝くアカガネサルハムシ、驚くと草をゆらすフクラズズメの幼虫。

カメムシの仲間の多さにもびっくり。

セミやアメンボも同じ仲間と知って又またびっくり。

奥の深い世界に又もや足を踏み入れてしまった。(本間喜美恵)

ごみのかたまりのようなものは？ クサカゲロウの幼虫



食べかすを背中につけたクサカゲロウの幼虫

茂みの葉の上に、5ミリくらいのごみのかたまりのようなものを見つけましたよ。じっと見つめていると、なんと、そのかたまりが動くではありませんか。「先生、先生、これ、何ですか？」

と、博物館の田中先生に尋ねると、「すごいですねえ！これはクサカゲロウの幼虫ですよ。幼虫が食べたアブラムシの食べかすなどを背中にのせているんです。よく見つけましたね！」と、教えていただいたうえにほめてもらいました。ルーペで拡大して見ると、いかにも私、肉食系ですよと示すような2つの鋭いはさみのようなあごとつづらな目、小さな足が、ごみのかたまりの下にあることがわかりました。

海草を体につけて身を守るカニは、はさみを器用に使ってつけるのですが、この幼虫、どうやって背中に食べかすをつけるのでしょうか。そして、この姿からどのような過程を経て、あの、美しくてはかなげなクサカゲロウの成虫へと変身するのでしょうか。不思議がたくさん詰まったごみのかたまりですね。(上田貴子)

蛾の美しさに魅せられて



キンモンガ 開張 32-39 mm

前回の『サポちゃん通信』に、苦手だった蛾が魅力的に思えてきた。少し本腰を入れて調べようとの思いを書いた。あれから3か月、鴻ノ峰エリアの採集とともに、他のフィールドや自宅の灯火に来る蛾も採集している。その過程で、蝶とは違う蛾の魅力について感じたことをいくつか記してみる。

- ① 採集しても採集しても、初めて見る種類にお目にかかる。
 - ② 蛾の大きさは5 mm以下から10 cm以上の大物まで様々あり、特に小さなものは微小針と拡大鏡が必要。しかし、拡大してみると思ってもみなかったきれいな模様や色彩に出会え、その美しさは息をのむほど。
 - ③ 蛾の多くは翅が柔らかく、鱗粉は取れやすく、翅の広がり方も種類によりさまざままで標本作成には苦勞する。しかし小さな種類は毒ピンを活用すれば本体に指で触ることなく標本にできる。毒のある種類も大丈夫。
 - ④ 夜間採集で、一度に多くの種類に出会える。
 - ⑤ 四季それぞれに発生する種類があり、年間を通じて採集可能。
- 今は、どの種類が珍しいのか？発生期間、発生場所、雌雄の違い、食性もわからないので、図鑑や過去の採集記録、文献、ネット情報などを参考に多くの種類と出会うのが楽しくてしかたない。ビロードハマキやキンモンガの群舞にも出会え、蝶とは違った魅力にすっかりはまってしまった。博物館でその美しさに触れてみませんか？（吉本進）

ありふれたチョウと思っていたのに



ツマグロキチョウ 開張 35-40 mm

9月中旬とはいえ雨上がりの気温の低い日でした。いつもチョウを採集している山沿いは朝霧で視界も悪いようでチョウは飛ばないだろうと判断して木戸神社近くの公園に行きました。ここは去年の今頃、オオセイボウを採集した場所です。しかし、気温が低いせいかチョウやハチなどほとんど見当たらない状況でした。わずかにキチョウが数頭飛んでいましたが、キチョウはさほど珍しいものではなく、これまで積極的に採集はしませんでした。しかしその日は他に昆虫は見つからずとりあえず1頭を採集して他を探していると地面を這うように弱々しく飛んでいるキチョウを見つけました。キチョウはもう採集していたので採ろうかと迷っているとそのキチョウは小ぶりで翅裏面の模様が少し違うことに気付きました。別の種類かもしれないと思い確保しました。その日は、ツマグロヒョウモンを加えたチョウ3頭だけの採集でした。博物館に戻ってそのキチョウを図鑑で見るとツマグロキチョウと判明しました。すると学芸員さんが、「珍しいですね。それ絶滅危惧種ですよ。」と言われて驚き、調べてみると絶滅危惧種Ⅱ類となっていました。理由は食草のカワラケツメイが近年減少していてそれに伴ってツマグロキチョウも減少していることでした。普通にいると思えたキチョウもいろんな種類がいてその中でも絶滅の恐れがあることがわかった貴重(キチョウ)な1日となりました。(村上敬司)

セモンジンガサハムシ



セモンジンガサハムシ 体長約7mm

昆虫採集で出会えてうれしい虫の一つにセモンジンガサハムシがあります。大きさは7ミリほど、形はまさに陣笠。真ん中が丸く盛り上がって外縁部は水平。頭の部分に触覚がチョンチョンと出ています。この虫の一番の特徴はなんとといってもその美しさです。金色。透明で薄く丸いゼリーの中に金箔を閉じ込めたような感じです。

特に珍しいわけではなく、昆虫採集では桜の葉の上でよく見かけます。捕まえようと手を伸ばすと、ポロッと葉から落ちてどこかに行ってしまう事が多いので、下に網を構えて網の中に落とすようにして採集します。人の気配を感じると コソコソと葉の陰に隠れたり 鈍く飛びたったりもします。金色に輝く派手な外観とは対照的に行動はちょっと控えめな感じです。

でもこのジンガサハムシ、標本にするとゼリーのような透明感は無くなり輝く金色も黄土色に変化してしまうのです。美しいまま標本に残すことはできず残念です。が、もし死んでも金色のままだったら・・・玉虫のように沢山沢山とられて工芸品に使われていたかも・・・はたまた螺鈿の貝みたいに漆で固められていたかも。私は勝手に妄想します。

やはりあるがまま、はかない美しさだからこそ今も普通にお目にかかれるのかもしれませんが。

桜の葉の上に金色に輝く小さな虫を見つけると ちょっとだけラッキーな気がします。(藤田かおる)

お菊さん？



ジャコウアゲハの蛹



大型台風 18 号接近中の 9 月 15 日、吉敷川土手の道路でフクラスズメの幼虫が車にひかれて何匹も死んでいました。まだ横断中のもいましたが、車も多いしくまく渡りきれぬか心配です。

そんな中に、からだの中央あたりに白いベルトをしめ頭にはオレンジの飾りを何個か付けたおしゃれさんがいました。この辺りにはジャコウアゲハが多いので、多分そうだろうと思い家に連れて帰る事にしました。

次の日、幼虫はケースの横のカベにいましたが夕方にはフタの裏側に移動していました。

二日目、同じ場所でからだのまわりには うっすら綿のようなものが見えます。チョウだと思ったのにマユを作るの？

三日目、「えーっ！！」黒っぽかったのが、全身黄色でオレンジの角みたいなのが 2 本。しかも 2 本の透明な糸でフタに止め付けられてぶら下がり、前日までとはまるで別モノです。

見つけてから 1 週間後、博物館へ持参したらやっぱりジャコウアゲハでした。そして今の状態は「お菊虫」と呼ばれ、このまま越冬するのだそうです。

はたして、お菊さんの運命やいかに一。(山田恵美子)

ノコギリカメムシ



ノコギリカメムシ 体長 12-16 mm

鴻ノ峰林道沿いの草の上にいるノコギリカメムシは腹部の縁にノコギリのようなギザギザがあります。カメムシやハムシの仲間は葉の上や裏側にじっとしていることが多いので、こちらもじっとして辺りを見るとみつかることがあります。よく見かけるクサギカメムシと大きさも同じほどなのでちょっと敬遠。しかしよく見ると明らかに形状が違います。全体にごつごつした印象で厚みもあります。

同定するにあたって昆虫図鑑を開けば、カメムシ目の多さに圧倒されます。大きさや色ばかりでなく姿の違いも多岐にわたります。セミや水生昆虫のアメンボなどもこの仲間です。カメムシは口が針状でそれで樹液や体液を吸います。小さくてハムシと識別が困難なときは口をみます。肉食のものもありストローのような口針は想像力をかきたてます。そんな中でノコギリカメムシは昆虫好きの人たちからカッコイイのお声を頂戴する人気者のようです。

5月頃の新緑の美しい季節になれば鴻ノ峰周辺は多くの昆虫たちの生息する場所になります。カメムシたちもどんどん出現します。かわいいマルカメムシ、アカスジキンカメムシの幼虫。ちょっとお洒落なエサキモンキツノカメムシ。それはもう昆虫密度増大です。私も臭いを敬遠しながらも多くの種を同定しています。しかし、今のところ捕獲した中でカッコイイと言われたのはノコギリカメムシだけです。(岡田美子)

スミレ



スミレの花

スミレは日本の春を彩る愛らしい花の代表格で、スミレ科スミレ属に含まれる種の総称（広義）もしくは一つの種（狭義）をいいます。日本には60種近くのスミレがありますが、糸米川河川園周辺では10種余りを見ることが出来ます。このうち（狭義の）スミレはスミレ科スミレ属に含まれ、その学名は *Viola mandshurica* で示されます。この学名について、*Viola* は”スミレ属”を示し *mandshurica* は”満州の”という意味です。ヨーロッパの大航海時代以降に新種の植物を求めて世界中に旅立った植物学者の一人が清国（現在の中華人民共和国）東北部の片隅で小さな花を見つけ学会発表したものでしょうか。壮大な歴史ロマンを感じます。

もし日本で発見されていたら *Viola japonica* という学名になっていたかもしれないなどと想像してみるのも楽しいものです。ちなみに *Viola japonica* という学名はコスミレに与えられています。これも糸米川河川園周辺で見ることが出来る可愛いスミレです。

春早くまだ花の少ない時期にスミレの仲間を見つけると、これから訪れるであろう花いっぱいの季節を期待して心が躍ります。春のひと時をスミレを探して一緒に歩いてみませんか。（上田洋史）。

兄弟山林道や鴻ノ峰林道沿いの冬の昆虫



クヌギカメムシ 体長 12-14 mm 産卵の様子 クヌギやコナラの樹皮に卵を産む。卵は薄緑の栄養分を含むゼリーに包まれ、ふ化した幼虫が食べる。



ヨコヅナサシガメ 体長 16-24 mm 冬 4 齢幼虫は桜などの樹皮のくぼみで集団で越冬する。3 月ごろ活動し始め 4 月に成虫になる。刺されると痛い注意。



フトカマドウマ 体長 22-37mm 大型のカマドウマの仲間で成虫越冬する。冬 東屋やトイレなどの建物で見つかる。



マダラニジュウシトリバ 開張約 13mm 成虫越冬 活動期には採集できなかったが、葉で休眠している個体のみつけた。食草はスイカズラのつぼみ。



カオマダラクサカゲロウ 開張 11-13 mm 成虫越冬し、常緑樹の葉の裏などにいる。枝などを叩くと下においた傘などで落ちてくる



ヒナカマキリの卵しょう 長さ約 10 mm 丹念にツバキなどの葉の裏を探すと見つけることができる。寄生バチの出た痕をもつ卵しょうもある。

兄弟山林道や鴻ノ峰林道沿いの春の昆虫



トビモンオオエダシャク 開張 50-70 mm 大型のシャクガの仲間。3~4月のみ見ることができる。森の中のトイレなどの明かりに集まる。



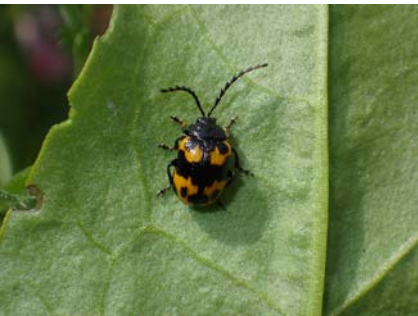
ツマキチョウ 開張 45-50 mm 3~4月のみ見られる。ふわふわと弱々しく飛ぶので、スジグロシロチョウやモンシロチョウと区別できる。食草はタネツケバナ他



コツバメ 開張 23-30 mm 3~4月のみ見ることができる。せわしなく飛ぶが、すぐに枝先などに止まるので観察できる。食草はアセビのつぼみと新芽。



ピロウドツリアブ 体長 7-11 mm 3~4月のみ見ることができる。長い口をのばしホバリングしながら花の蜜を吸う。幼虫はヒメハナバチの幼虫に寄生。



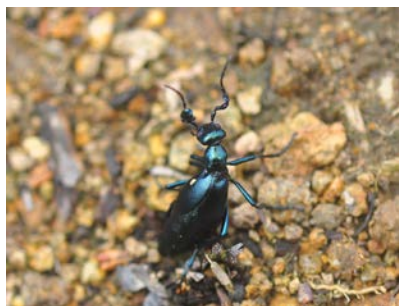
イタドリハムシ 体長 7-9 mm イタドリやスイバの葉を食べる。3~4月はよく発見できる。近づくと飛んだり下に落ちたり逃げてしまう。



ムネアカアワフキ 体長 4-5 mm 4月サクラの新葉などで見ることができる。背の赤色が目立つのがメス。幼虫はサクラの枝に巣をつくり育つ。



ヒメツチハンミョウ メス 体長 23 mm程度 個体の腹部は大きい 春、地面を歩いているのをよくみる



ヒメツチハンミョウ オス 体長 7-20 mm程度 オスには触角に突起があるので識別できる

ヒメツチハンミョウの生活史はとてもドラマチックです。メスの大きな腹部から数千の卵を土の中に産み、ふ化した幼虫は近くの花に登り、来たハナバチの体にしがみつきハナバチの巣で卵・花粉・蜜を食べ成長します。ハナバチの巣にたどり着ける幼虫はわずか。毒をもつ。

主な参考文献

日本の昆虫 1400①・② (2013) 梶真史他 伊丹市昆虫館監修 (文一総合出版)
 虫の私生活 (1998) ヒッキオ編著 (主婦と生活社)
 公園で探せる昆虫図鑑 (2011) 石井誠著 (誠文堂新光社)

表紙説明

ムシなんて嫌い！なんて言われていた方も、少しは興味を持っていただけただしょうか。 標本で資料を残すこともとても大切な作業ですが、生きているムシを観察するのもとても楽しいです♡幼虫の時は何を食べるのか、成虫になったら？ほらほら♪皆さん知りたくなっただしょう♪ (原まゆみ)

山口博物館サポーター動物班活動報告 “サポちゃん通信” No. 2

発行 2018年2月8日

編集 山口県立山口博物館サポーター動物班

発行 山口県立山口博物館 〒753-0073 山口市春日町8-2

Tel 083-922-0294 Fax 083-922-0353